vinetur

モーゼルの生産者、2026年の収穫量を61万ヘクトリットルと予想 過去10年平均を18%下回る

雨の降らなかった9月に病害の発生が抑えられ、地域史上最も早いブドウ収穫となる中、果実の品質は良好に

2026年11月10日（火）



ドイツのモーゼル地方のワイン生産者は、暑く乾燥した生育期を経て、2026年の収穫量が減少すると見込んでいる。一方で、生産者からはブドウの品質が高く、収穫作業も例年になく順調だったとの声が上がった。地域のワイン協会Moselwein e.V.は火曜日、モーゼル、ザール、ルーヴァー地区の現時点での推計として、収穫量は約61万ヘクトリットルになるとの見通しを示した。2025年の74万3,000ヘクトリットルを下回り、過去10年平均より約18%少ない水準となる。

同協会はデッツェムで開いた秋季記者会見でこの見通しを発表した。生産者によると、2026年の収穫は管理が行き届き、一部では「ゆとりを持って」進められたという。雨の降らなかった9月に病害の発生が抑えられ、畑で大規模な選果を行う必要も少なくなったことが背景にある。

最終的な収穫量は、すべてのワイナリーと生産者が公式の収穫申告を提出する春まで確定しない。

現時点の推計では、最近の平均生産量である約70万ヘクトリットルを下回る。2024年の収穫量は45万ヘクトリットルと、さらに少なかった。

Moselwein e.V.によると、2026年は同地域で記録が始まって以来、ブドウの収穫開始が最も早い年となった。8月末までには、シーズン初めに販売される発酵途中の若いワイン、フェーダーヴァイサー向けだけでなく、スパークリングワインやスティルワイン向けのブドウも収穫されていた。収穫の大半は10月初めまでに終わった。

収穫量の減少は主に、2026年の春から夏にかけて降雨が少なく、気温が高かったことによる。若木が最も大きな影響を受け、一部の畑では灌漑が必要となった。古木は乾燥した条件によりよく耐え、同協会によると、主に小粒ながら香りの強い果実を実らせた。同じ乾燥した天候には明確な利点もあった。真菌性病害が抑えられたことで果実の健全性が保たれ、収穫時の作業負担も軽減された。

同地域の主要品種は引き続きリースリングで、モーゼル地区のブドウ栽培面積の62%を占める。モーゼルのワイン生産者協会は、2026年のリースリングの平均収量を1ヘクタール当たり約75ヘクトリットルと推計している。ピノ系品種は1ヘクタール当たり60～70ヘクトリットル、ミュラー・トゥルガウは約90ヘクトリットル、エルブリングは約100ヘクトリットルと見積もられた。

同協会によると、2026年のモーゼル地方の結実樹があるブドウ畑の面積は約8,136ヘクタールで、平均収量は1ヘクタール当たり75ヘクトリットルだった。この数字には新植の畑や若木の畑は含まれない。若木を含むブドウ畑の総面積は、2025年末時点で8,283ヘクタールだった。

Moselwein e.V.の会長、ヘニング・ザイベルト氏は、夏の記録的な暑さと干ばつで品質が損なわれるとの懸念は現実にはならなかったと述べた。2026年ヴィンテージは高品質で記憶されることになるとし、消費者はふくよかでバランスの取れたワインを期待できると語った。

飲料業界にとって、収穫量の減少はブドウ畑の外にも影響する。モーゼルは世界有数の知名度を持つリースリング産地であり、収穫量が少なくなれば、一部のスティルワインやスパークリングワインの供給が逼迫し、在庫計画に影響する可能性がある。ヴィンテージの品質が高いままであっても、今後数カ月の価格交渉を左右することも考えられる。